

柳田國男の戦時下における靈山観念

由谷 裕哉

柳田國男の山岳に関わる言説を検討する。柳田が一九一〇年代前半から山伏・修験を考察してきたことについては、既に触れたことがある（由谷裕哉『近世修験の宗教民俗学的研究』岩田書院）。しかし、山岳を死者の靈魂と関連づけるような立論はかなり遅れ、『民謡覚書』（一九四〇年）に再録された「広遠野譚」（初出一九三二年）からではないかと思われる。そこでは追分の歌詞などから、死者の靈が高山の頂上に進む信仰が問題とされた。

戦時下においてこの種の考察がなされた著作物の一つは、『神道と民俗学』（一九四三年）である。全体が四一パートに分かれた内、主に二六一―二九で山と神祭りとの関わりが述べられる。二六で里宮と山宮との対立、卯月八日进行山参りの日とすること、二七では盆の精霊送り以外の神送り、二八では神の御鎮座が山や丘の上などであったこと、山の神と田の神とが同一であること、二九では山頂を祭場とする神社の例など。

もう一つは、山伏祭文「羽黒祭文 黒百合姫」を取めた柳田國男編『黒百合姫物語』（一九四四年）の解説記事として書かれた、「山臥と語りもの」（一九四六年刊の『物語と語り物』に「黒百合姫の祭文」と改題のうえ再録）である。全一六パートのうちおよそ一三までは、この祭文で語られる事件の記録と考えられる統群書類従版『矢島十二頭記』、戸部正直『奥羽永慶軍記』などと、祭文との比較対照が主である。一三の後半で山伏の足が達者であることから鳥海山信仰と信州との関わりが触

れられ、一四では黒百合が立山の山の草であり何らかの關係があったのか、という提起がなされる。

一五と一六が「私の二つの疑問」となり、祭文とその典拠との比較対照から離れた議論となる。一五では日本の民間文芸と靈山の信仰との関わりが問として出され、祭文に登場する鳥海山の女別当が羽黒に近世まではあった、しかし黒百合姫の祭文は男もので、靈山の巫女とは直接の關係がなかったであろう、との推定がなされる。一六では死者の行く先が山の頂であったことが月山・鳥海をはじめ名山の信仰の起源ではなかったか、それがこの祭文から明らかにならないか、との提起がなされる。最後は、祭文の考察から完全に離れてしまいが、「先祖の話」（一九四六年）末尾近くで言及される「七生報国」が出て来るので、引用しておく。「『死ねばどこへ行くと思つて居るか』。斯ういふ方面からも今一度、尋ねて見る機会はないと言はれない。この問題に向つて現実の関心を抱く者は、今日の時代としては決して我々垂死の翁だけでは無いのである。極楽は十萬億土、あそこへ行つてしまつてはもう七生報国は出来ないからである」（『定本柳田國男集』第七卷、一〇四頁）。

この引用箇所限定すれば、『先祖の話』の全八一パートのうち六四「死の親しさ」で、「日本人の多数が、もとは死後の世界を近く親しく、何か其消息に通じて居るやうな氣持を、抱いて居た」（『定本柳田國男集』第一〇卷、一二〇頁）と記されることに通底するであろう。しかし、「山臥と語りもの」も『神道と民俗学』も、ある山が靈山とされる所以を死者の靈がその頂きに行くこととされることに求めるものの、『先祖の話』と

異なり、そのことと祖霊との関わりがほぼ議論されていないことに留意したい。

たしかに『神道と民俗学』では、三八で「とぶらひあげ」の後に「先祖様」とされるのが簡略に議論され、三九以降、そうした祖霊と氏神とが「氏神の合同」（同上、三八八頁）なる仮説を使って関連づけられようとする。しかし、このような議論（死霊の祖霊化、祖霊イコール氏神）は『神道と民俗学』において、二六―二九で考察された山宮・山の神・山や丘の上で祀られる神・山頂を祭場とする神社とは、関連づけられないのである。

イメージされる教祖像

——『稿本天理教教祖伝逸話篇』を読む——

堀内みどり

『稿本天理教教祖伝逸話篇』（以下『逸話篇』）は、こふき委員会の編纂で、当初は、編集し終えたものから五〇話ずつに分冊して、全四集二〇〇話が発行された。第一集は昭和四九年一月、第四集は昭和五〇年一〇月に発行。その後、内容の検討と字句の整理が行われ、年代順に収録して一冊にまとめたものが、昭和五一年一月、教祖九〇年祭の記念出版として刊行された。

その「はしがき」には、「力比べは、教祖が月日のやしろにお坐しますという理を、姿に表してお見せ下されたのである。』という一文が載っている。収録されている逸話のほとんどは、教祖が六〇歳以降のものであること（「月日（神）のやしろ」以

後で二〇年ほど経過している）、初めて出会う人の逸話が多々収録されていること、教祖から直接聞いた話を本人が書き残していたり、子孫に語り伝えた話であることなどを考えると、「月日のやしろ」という教祖のありようが、身近な体験として体得されてきたのではないかと思われる。同時に「序文」は、「ひながたの親たる教祖の、親心溢れる一列人間のをやとしてのお姿を、ありありと目の前に拝することができ」逸話を集めたと述べる。「逸話」から人はどのような教祖を感じ取っているのだろうか。ここではその全体像を概観する。

「月日のやしろ」であった教祖は、当然のことながら、尋常ではない「力」「不思議」を現した。「一 お言葉のある毎に」（以下括弧内の漢数字は逸話の番号）では、立教（天保九年）当時、十四歳と八歳であった教祖の子どもたちが、「私達は、お言葉のある毎に、余りの怖さに、頭から布団を被り、互いに抱き付いてふるえていました。」と伝える。また、七五日間の断食の中、徒歩で四里の道を歩いた話（二五 七十五日の断食）や、井筒梅次郎が「ここへ、一寸と顔を付けてごらん。」と言われ、教祖の片袖に顔を付けると見渡す限りの牡丹が花盛りであったという話（七六 牡丹の花盛り）などがあり、さらにいくつもの「力比べ」の逸話（六一、六八、七五、八〇、八一、一一八、一三一、一七四）はその分かりやすい例である。「力比べ」のような逸話では、「そっちで力をゆるめたら、神も力をゆるめる。そっちで力を入れたら、神も力を入れるのやで。」（一七四 そっちで力をゆるめたら）といった、いわば信心のあり方を論ず姿とセットになっている。

JOURNAL
OF
RELIGIOUS STUDIES

Vol. XCIV Supplement

THE PROCEEDINGS OF THE SEVENTY-NINTH
ANNUAL CONVENTION
OF
THE JAPANESE ASSOCIATION
FOR RELIGIOUS STUDIES

JAPANESE ASSOCIATION FOR RELIGIOUS STUDIES

March 2021